
月曜の朝は晴れ

§ 和々 §

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月曜の朝は晴れ

【Nコード】

N01821

【作者名】

S和々S

【あらすじ】

いつもぐうたらなみを優しくサポートしてくれる優仁だが、そんな二人の青春ラブストーリー！！

このお話は一人の女の子、ある男の子を好きになった女の子のお話。

「いつまで寝てんの〜！はやく起きなさい！」

ぼんやりとした頭に母の声が響く

「優仁くん来てるよ！」

意識がはっきりしてくる

「みさく！まだ寝てんのかく！」

記憶が繋がり、自分の置かれている状況を

「理解したあああ！！！」

布団をはねあげ、ドタドタと階段を駆け降りる

「ママおはっ！パパもおはっ！」

「「おはよう、みさ」」

まだパジャマだ、着替えなければ、

「ああんもう！ドタバタヒロインの朝は食パンでしょ！？」

テーブルの上には昨日の夕食の残り

「知らないわよそんなの、ねえパパ？」

新聞からビン底みたいな眼鏡を覗かせる

「ああ、食パンより納豆を食べなさい、納豆はいいぞ」

簡単な容姿の説明をすると”はかせ”みたいな感じだが近所の自動車整備工場の所長をしているパツとしない父親である

「知らん！納豆滅殺！朝は食パン！食パン＞納豆よ！」

「いいからちゃっちゃと支度しなさい！優仁くん待たせてるよ！」

こちらは近所の”スーパーまるしん”で働くしつかり者の母親だ

「ああ忘れてた！」

パジャマに寝癖だが非常事態だ、

「優仁！先に行ってて！」

バタツと開いた玄関からみさの顔が飛び出す

「あいよ」

非常事態ではあるが毎日直面している場、どうなるかの全ては優仁にはわかっていた

「コンビニで立ち読みしてるわ」

みさに背を向けてゆっくりと歩き始めながら右手を軽く上げる

「あんまし待たせんなよ」

「おけ！じゃまた！」

髪を手櫛で直しながら家に戻り階段を駆け上がる

「ああ！もう死ぬ！！」

部屋に戻ってハンガーから制服を手にとる

清潔な洗剤の匂い、夏服の制服に袖を通す

「ああ〜もう！リボン付けるのめんどい！！」

真っ赤な大きなリボンが胸を飾る

「ブブ太行って来ます！」

枕の横の子ぶたのぬいぐるみに挨拶する、返事は

「みさ〜！早く行ってあげないと！優仁くんも遅刻させる気！？」

「わかってる！お母さんはいちいちわかってること言わないで！」

色あせた靴のつま先に足を滑り込ませ走りながら出て行く

「行って来ます！」

「「行ってらっしゃい」」

みさの一週間がまた始まる、月曜の今日は晴れ

冷房の効いた店内、手を伸ばせば漫画に雑誌、優仁はそこにいた

「7時56分…」

ページをめくる手を止めレジの奥の時計を見る

「あと4ページ…」

再び週刊誌に目をおとす

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

喉が熱い

「ハア、ハア…ハッ」

うまく息が吸えない

「ハア…ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

週刊誌を読み終えた優仁はそこでジュースを二本買った

「あ、袋いりません」

「ありがとうございます」

エコは心がけているつもりでいる

もちろん弁当買うときも割り箸は貰わない

「またのお越しをお待ちしております！」

背中に声を聞き、コンビニをあとにする

遠くに人影を見る

「優仁！！死ぬっ！！！！」

今日もピツタリだ

「ほら、ビックルだぞ」

147円、これを毎日おごっているわけだが、優仁には当たり前のように感じていた

「ああ、優仁サクスッ」

受け取ったビックルを一気に飲み干す

”ゴクッ、ゴクッ、ゴクッ…”

渴いた喉にひんやりとしたビックルが落ちていくのを感じた

「っっぱ！いつも悪いね」

「買っておかないと文句言うじゃん」

優仁は少し嬉しかった

「髪、変じゃない？」

続かない会話は続けない。それがみさだ

ろくに寝癖を直していない、みさは優仁の前でぐるっと回ってみせた

「変じゃないよ」

「ん、ありあと！じゃあ行こっか！」

「おう」

パタパタと優仁をリードしてして見せる

「早くしないと遅刻しちゃうぞ？」

キャピキャピと笑ってから手招きを試みせた

「誰のせいだよっ！」

みさはバカみたいにコロコロと笑った

優仁は照れを隠しながらもみさの後を追った

やっこの思いで学校に着いたが校門がしまっている

二人は校舎の裏、庭園部のハウスへ向かった

この道路に面したドアに鍵がかかることはない

「よし！到着！」

「もう何ヶ月校門から登校してないんだろぅな…」

目をやればギリギリアウトだったであろう生徒が生徒指導部の”田代”に怒られている

優仁はかばんからコンビニで買ったもう一つの飲み物、烏龍茶を引っ張り出し半分まで呑む

「優仁！半分ちょうだい！走ったから死ぬ！」

優仁が答えるより早くみさは優仁の手から烏龍茶をさらう

「くっくああ！染み渡るわ」

「オッサンやん」

「誰がお前の母さんか！」

「言っていないよ？」

二人は誰にも見つからないよう部室脇の勝手口から校内へ入った

みさは今日の優仁がいつもと違うのに気が付いたのは下校のときだった

「なんかさ、今日、優仁暗いよ」胸のわだかまりを抑えきれず感じていたことをぶつけた

「何言ってるんだよ、いつもとおんなじ！むしろお前が明るすぎんだよ」

やっぱりだ、みさは確信した、今日の優仁はおかしい、何か良くないことに巻き込まれている

「分かるんだよ、いつもとなんか違うってことくらい」

みさは元氣付けようと大きく腕を広げ『さあ、この胸に飛び込んでおいで』のポーズをとるが、優仁は俯いていて見えていない

「みさに言ってみ？さあ！」

自分の名前と掛けた渾身のダジャレのつもりだが

「……………」

「どうせわたしバカだから、言っても分かんないかもよ？独り言だ
と思ってさ」

優仁が顔をあげた

「あのさ…」

優仁は堅く閉じた口をあげた

目が赤い、まぶたが少し腫れている

「俺一人暮らしだろ？実家のおふくろが倒れてさ、」

え、何それやばいじゃん、

早く帰ってあげなよ！

みさには言えなかった

「店が大変になってるらしくてさ、帰らなきゃいけねえんだよ」

本気で言ってるの？ちょっと待ってよ、

みさには理解できていた、でも分かりたくなかった

「いつこっちに帰って来れるか分かんねえんだ、もしかしたらこのまま帰って来ないかも…」

いやだ、

「……わたしバカなのに、優仁の言ってることよく分かる。」

「ごめん」

「……優仁の代わりになる人は？」

「電話して回ったけど……」

「なら謝らないでよ、」

気が付いたら二人の足は止まっていた

「……お母さん、よくなる？」

「……ああ」

何か言いたい、聞きたいこともまだまだある、

帰ってる間は今の家どうすんの？誰がわたしのお弁当持って行くの？誰が朝わたしを迎えに来てくれるの？借りてた”おおきく振りかぶって”返してないよ？まだ読み終わってないけど。

「いつ出発すんの」

「…帰って荷物がまとまり次第」

「…嘘。優仁の実家よりはマシ、でも結局ここも田舎。電車と電車の間何分あると思ってるの」

「…ごめん」

「誰も悪くない」

「…次のやつで帰る」

涙が出そうになったが今泣くわけにはいかない

優仁が帰りにくくなってしまふ

「……………そ、…またね」

優仁のためにも、自分のためにも

「…じゃあな」

明日から優仁はいない
優仁のいない一週間になる

今日のみさは驚く程はやく起きた

「あら、今日のみさは早いのね？」

みさの母は階段を降りてくる音に気付き振り返って声をかける

「うん、なんて言うかさくくつした！って感じ？」

元気なそぶりをして見せる
間違った気もするが…

「よかったゝあんまり早いんだものどこかおかしいのかと思っちゃった！」

再び母はまな板に向きなおる

「わたしだってたまには早く起きるよ！」

まだ食事の用意がしていない席に新鮮さが湧き、少しの間それを忘れさせた

『トントントントントン』

長いこと聞いていない音だ

「何作ってんの？」

母の背中に問い掛ける

「みさのお弁当よ」

「んゝ…」

……優仁

「みさあ？座ってるだけならテーブルにこれ運んでえ」

「はゝい…」

「ご飯も盛ってね？パパの分は二つよ？」

「えゝなんでゝ？なんで二つう？」

「パパはたくさん食べるのよ、みさはご飯食べないで出て行くから
分かんないでしょゝ？」

「へえパパって意外と食べるんだ」

「そうよ〜…」

「意外〜…」

「そうね〜…」

「……………」

優仁はどうなんだろう？

「お弁当、わたしが持つてく」

「あら」

喧嘩でもしたの？目でみさに話かける

「…違うし」

どうだか、声は出さなかったがそう言いたげにみえた

…優仁

「お味噌汁完成っ」

鯉節だろうかダシの元だろうか、みさには分からないがお腹の空いてくる臭いを鼻いっぱい吸い込む

「お」

「よし！食べよっか！」

「パパは？」

「すぐ来るわよ」

『タンタンタンタン』階段を下りる音が聞こえてきた

「なんだみさ、今日は早いな」

くいとピン底眼鏡を中指で上げ、スリッパをパタパタ言わせながら歩いて来る

「今日はね、くつしたなんだ」

冷蔵庫のとびらを開けて立ち止まり牛乳に手を伸ばす

「そうかゝみさは今日くつしたかゝ、父さんは今日乾燥機だゝ」

椅子に腰を下ろした父はコップに牛乳を注ぎながら言った

「パパまでそんなわけ分からないこと言うからみさがいつまでもバカなのよ」

両手を腰に付けてしかるような態度をとってみせる

「パパの悪いところ受け継いだかわりにママのいいところ受け継いだから……」

言葉に詰まった父は牛乳を一口飲み、新聞を取りに郵便箱へ席を立った

「……………」

母が慈悲の目でこちらを見ている

「みさ？あなたは取り柄がないんだからせめていい人と一緒になつて親孝行してね？」

（痛い、痛すぎるよママ…）

十分に承知しすぎている欠点を突かれたみさは深く落ち込んだ

「もういい！お味噌汁飲んで学校行く！」

「頑張ってくるのよ」

新聞を手にした父が帰って来る

「父さんも期待してるぞ」

食器を流しに出したみさは階段を駆け上がって部屋に帰った

ベットに飛び込み優仁を思い出した

「…まったく！パパもママを何を期待してるってんだか！」

いないというのはわかっていたが、優仁を思うとなんだかポカポカとした気分を覚えた

「っ！優仁いっ♪」

ポカポカして頭がボケっつとしてくるよっ♪

みさはまぶたを閉じて優仁を……

「……さ……く……な……！」

……

「みさ……は……く……きなさ……！」

.....

「みさ!は……く……きなさい!」

.....

「みさ!はやく起きなさい!」

ああそうか

「いつまで寝てんの!?!」

夢だったんだ

「みさ!起きなさいってば!」

でもどこから?

「せっかく早く起きたのに寝ちゃだめでしょ!」

.....？

「理解したあああああ！！！」

仰向けのみさ、膝を曲げお腹の上まで持ってくる

「だっしやあああ！」

一気に足を伸ばしその反動で上体を起こす

「ブブ太！」

行ってらっしゃい、くりくりしたビーズの目がみさに言った

制服に袖を通す、洗剤ではなく危険な香りがする

「遅刻の予感！！！」

ピンクと黒の可愛いスニーカー

「パイルダーオ○！」

走り出した足はいつもより心なしか重い

（優仁がいなくなっちゃってわたしは走れる！！）

優仁のいない一週間が終わり

また月曜日が来た

昨日の日曜日の夜から雨が降り続けている

「お前ほんとに料理へただな」

みさの作ったチャーハンを食べた優仁はテーブルに肩肘をついた

「ひっど！もつと角のない言い方してよ！」

みさはテーブルの反対側に座る優仁に起こった

「みささんは食べる方専門の脳をお持ちなんですわね」

ケラケラと笑いながらスプーンでチャーハンをつつき回す

「あゝマジでうざいんですけど！」

みさは優仁の前からチャーハンと手の中のスプーンを奪って丸呑みにした

「どうだ？ご飯べちゃべちゃしてるだろ？」

「みさ〜！起きなさい！」

夢の中のみさに声が届いた

「みさ〜！またご飯食べれなくなるよ〜！」

剥がされた布団がベッドの端に寄せられる

「ああ〜布団剥がれた〜」

「みさがいつまでも起きないからでしょ〜」

楽しかったのに短い夢だったな、みさは肩を落とした

「優仁くんにもうお弁当渡したからみさも早く行くんだよ」……？

え？優仁が？事態を飲み込めず声が上がらない

「……？なあにみさ？寝ぼけてんの？」

唾を深く飲み込んで改めて声を上げる

「優仁？」

「他に誰がいんのよ？」

「？」

優仁のお母さんが倒れたから一人暮らししてる場合じゃないって帰ったのに？

お互いが頭に疑問詞を浮かべている

「食パンにしたから、焼いてあるから早く行くのよ」

母はドアを閉めずに階段を下りて行く

「優仁が？」これも夢だろうか？みさの頭をふと思いがよぎる

夢でいい優仁とまた遊びたい

「ボケら〜っとしてる場合じゃない！」

制服をハンガーから外す、ふわっとした”幸せ”がみさを満たしていく

「ママ、起こしてくれてありがとう!」

階段を下りる母の背中に部屋から顔を出してお礼を言った

枕の横のこぶたのぬいぐるみ

ビーズの瞳、その奥にみさは何かを見た

「行ってきます!」階段を駆け下りる、

(今日の階段短いかも)

飛ぶように足が軽い

「朝ご飯いらない!行ってきます!」

「え!?!この前食パンにしろって言ってたでしょ!」

「ごめん！今日は無理！」

かかとを潰した履き方のまま傘立てから傘を持って飛び出した

優仁はコンビニを目指す途中で一つ思い出す

「…財布、忘れた」

たまにはいいか、毎日みさにジュース奢る方がおかしいんだ、遅刻ぎりぎりまで起きないから弁当まで持ってやってるし、また歩き出す

大きな歩幅の後ろから女の子の声が追ってくる

「優仁 いいいい!!」

せっかく久々の顔合わせなのにもう少しムードある登場しろよ、

おふくろが回復しなかったらここにいねえんだぞ

優仁はゆっくり振り返った

「お前もう少しムードのあ——」

「……………」振り返った優仁の胸には傘を捨てて抱きついて
いるみさのつむじがあった

「…背、伸びたな」

「……………」

優しく抱き寄せた、みさの体温が優仁の体にじかに伝わってくる

みさは抱きついた腕に力を込め、いっぱい息を吸った

「くすぐったいよ」

「…優仁の匂いがする」

「それってどんな匂い？」

「ぼかぼかする」

「そか」

「……………」

「どうだ、俺がいなくて暇だったか？」

「……………」

「…学校着いたらノート写させろよ」

「……………」

「………」

「…好き。」

「え？」

「……いま気づいた、わたし優仁が好き」

「そか」

「…優仁と結婚する」

「あんまりガキみたいなこと言うなよ」

「…本気だし」

「そか」

「優仁がこれから朝起きて最初に見る顔も、夜寝るとき最後に見る顔も、ずっとわたしだけだから」

「やっぱりお前は俺より遅く起きるってことか」

「そういうこと言っていないし…」

「…悪い」

「……………」

「今いくつだ」

「…16」

「俺も16」

「……………」

「あと二年だな」

「うん」

「……………今日さ、家に財布忘れた」

「……………今日だけは許す」

「ありがとう」

「…でもタダじゃない」

「こうだろ？」

軽く曲げた中指にみさの整った顎をのせ、親指で掴み引き寄せる
優仁の唇とみさのそれを重ねた

「…もっかいして」

「だめ」

「んっっ…」

唇を尖らせて抱きついてくるみさに優仁は言った

「月曜の朝は晴れじゃないとな」

雨雲の去った空には代わりの”虹”が残っている

「虹の橋の終わりがどこか知ってっか？」

「知らないよそんなの」

「免許取ったら探しに行くか」

後に残ったのは濡れた傘と恋の跡だけ

これはひとりの女の子のお話、恋が一方通行から変わった瞬間のお話

「虹の橋にも終わらんかないよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0182i/>

月曜の朝は晴れ

2010年10月13日01時23分発行